

SNW対話イン佐賀大学2016

平成28年10月13日

(世話役) 廣 陽二

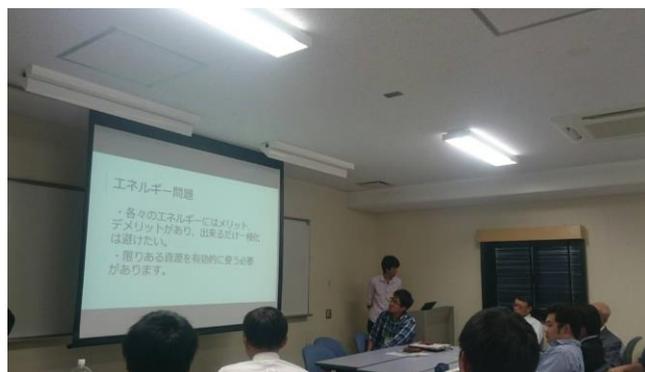


目 次

I. SNW対話イン佐賀大学2016 実施概要

II. SNW対話イン佐賀大学2016 詳細報告

1. 基調講演概要
2. 各グループ対話のテーマとシニア分け
3. 各班の対話状況報告
4. 各グループのまとめ、発表
5. 各参加シニアの感想
6. ま と め



I SNW対話会イン佐賀大学2016 実施概要

平成28年10月13日

(世話役) 廣 陽二

1. 日時

平成28年9月30日(金) 13:00~18:00 (引き続き懇親会~19:30)

2. 場所

佐賀市本庄町1番地佐賀大学本庄キャンパス

対話会会場：理工学部1号館南棟3階 多目的講義室

3. 大学世話役

光武雄一教授 (海洋エネルギー研究センター)

4. 参加学生

機械システム工学 16名 (4年~MC2)

5. 参加シニア：9名

(九州以外) 早野睦彦 (SNW代表幹事)

(九州) 村島正康 (西日本技術開発)、大塚徳勝 (元原研)、香川達雄 (元東芝) 泉館昭雄 (泉館技術士事務所)、野村真一 (元三菱重工)、廣 陽二 (西日本技術開発)、松岡信明 (元九州環境協会)、小池正実 (九電産業)

6. スケジュール (12:30受付開始)

13:00~13:15 開会挨拶 (村島正康)

シニア自己紹介

対話会の進め方説明 (光武雄一)

13:15~14:15 基調講演1 (早野睦彦)

「我が国、世界のエネルギー事情—原子力をどう考えるか—」

13:30~15:15 基調講演2 (大塚徳勝)

「知って安心、知らないと怖い放射線・放射能」

15:25~17:00 各グループ対話 (対応したシニアは以下のとおり)

1G 早野、小池 2G 村島、大塚

3G 泉館、香川、廣 4G 野村、松岡

17:00~17:50 各グループのまとめ、発表 (6分×4グループ)

17:50~18:00 シニアによる講評 (早野睦彦他各シニア)

閉会挨拶 (光武雄一)

18:00~19:30 懇親会 (学内かささぎ会館)



7. 結果概要

- 今回の対話会はいくつかの点で従来の対話会のやり方と違う試みを行った。一つは基調講演を「エネルギー事情、原子力の必要性」に加えて「放射線と放射能の理解」を加えたこと。ふたつ目はシニア内での議論と大学側の事情（夏休み明けの学生の準備時間不足等）を踏まえて対話を簡素化し、学生からの事前質問及びそれに対する回答作成は行わず、また、各グループとも事前にテーマを設定せず、2つの基調講演を踏まえて自由に対話を進める形をとった。
- 佐賀県は玄海原子力発電所の立地県でもあり、参加した学生は基調講演に非常に熱心に耳を傾け、また、対話においても原子力に対する自分の思い、疑問を率直に語ってくれ、シニアもいつもより熱意をもって対応していただいた。
- 今回の対話会を通して、学生諸君はわが国の厳しいエネルギー現状の再認識、放射線・放射能の不安払拭更にはサイエンスリテラシー、メディアリテラシーの大切さに気づいてくれたようであった。

以上

II SNW 対話イン佐賀大学 2016 詳細報告

1. 基調講演概要

(1) 講演 1

○テーマ：「わが国・世界のエネルギー事情」

○内容

1) エネルギーを考える前に

1972年ローマクラブで「人類はこれ以上の成長を望んではならない」と宣言。
化石燃料時代は人類史上では一瞬の出来事であり、埋蔵量は50年から100年。

2) わが国・世界のエネルギー事情

世界の1次エネルギーの約86%は化石燃料、日本は96%を輸入に依存。
福島事故後、日本の発電電力は化石燃料（特にLNGと石炭）にますます依存。

3) 原子力エネルギーについて

原子力はエネルギー源の3要件（大量、集中、エネルギー密度高）を満足。
EPR (Energy Profit Ratio) も他電源に比べ高い。

4) リスクについて考えてみる

危険を引き起こす事象がハザードであり、そのハザードに社会や個人が被害を蒙る確率をかけたものがリスク。

日本人はリスクという言葉を好まないが、科学技術論的に絶対安全やゼロリスクはありえない。

5) 皆さんはどのように考えますか

科学技術には光と陰があり、光だけの科学技術は存在しない。

失敗を許さない社会に進歩はない。

科学を正しく理解し、メディア情報を正しく判断するためには、サイエンスリテラシー、メディアリテラシーが必要である。

原子力を失うリスクも考えるべきでは。



(2) 講演 2

○テーマ：「知って安心、知らないと怖い放射線と放射能」

○内容

1) 原子力エネルギーとは

核分裂の原理、原子力エネルギーの源と特徴、原爆との違い
原子力発電の原理、核融合反応、福島事故の原因、原子力の課題

2) 放射線とは

放射線の種類、粒子放射線の実体

3) 放射能とは

放射線との混同、自然放射能と人工放射能、放射性原子核の崩壊、放射能の強さの単位、放射線の人体への影響、身の回りの放射線、役立つ放射線

4) 放射能の強さと放射線の強さの関係

放射線の量（線量）、線量の単位、自然放射線
身の回りの放射線の強さと線量、福島の調査実測値

5) 放射線の性質

強い透過力、電離（イオン化）作用、突然変異の原因の一つ

6) 放射線の人体への影響

影響は全身か局部か、急性か慢性か、外部か内部かで異なる

7) 福島県民の被ばく線量

外部被ばく線量はチェルノブイリ事故の 1/10
内部被ばく線量はチェルノブイリ事故の 1/30



2. グループ対話のテーマとシニア分け

- | | |
|-------------------|---------|
| 1 班：もんじゅの今後について | 早野、小池 |
| 2 班：高レベル放射性廃棄物処分他 | 村島、大塚 |
| 3 班：基調講演 2 件を踏まえて | 泉館、香川、廣 |
| 4 班：基調講演 2 件を踏まえて | 野村、松岡 |

3. 各班の対話状況報告

1) 1 班

○対話テーマ：もんじゅの今後について

○参加シニア：早野 睦彦、小池 正実

○参加学生：機械システム工学科 4 名（大学院 2 年生 1 名、大学院 1 年生 2 名、学部 4 年生 1 名）

○対話の概要

- ・シニア、学生の順での自己紹介後、自ら手を挙げた年長の学生による進行のもと対話が進められた。「もんじゅ」が、テーマに選ばれたのは、シニアの経歴のほか、その去就が、マスコミにも盛んに取り上げられているためであろう。
- ・高速炉の本来の目的が燃料の増殖にあることやナトリウムが冷却材として選ばれている理由、各国の開発状況、これまでのトラブルなどが確認された。
- ・軽水炉は「Industry」として商業化されている。もんじゅは、核融合のような「Science」の領域は越えているものの、実用化に進むための「Engineering」の段階にあって、そ

の開発必要期間は長期にわたらないにも拘らず、商業炉と同じ水準の規制を要求されていることなどから、再稼働には約6千億円必要といわれる。

- ・原子力は、小さなトラブルでも過敏に報道されるが、原子力船むつ、TMI、チェルノブイリ、福島第一などが、逆風の大きな要因となってきた。やはり、「信頼」が重要なカギとなる。
- ・エネルギー問題に対するメディアの理解や義務教育での取り上げ方などについても議論された。
- ・学生側からは、次のような意見が出された。
 - ・原子力を怖いとは思っていないが、それをきちんと伝えることはむずかしいと感じる
 - ・もんじゅのナトリウム漏れ事故は聞いてはいたが、ナトリウムの役割を知った。海外のほうがむしろ進んでいることも初めて知った
 - ・ニュースでは、(点検漏れなどで) しっかりやっていないと聞こえてくるが、国民に正しい情報を伝えた上で国が率先して開発すべき
 - ・メディアを仲間にしたいが、むずかしい。慎重派を説得できるような伝え方が必要
 - ・エネルギー問題を義務教育で教え、考えさせるべき
 - ・もんじゅに軽水炉と同じ水準の安全規制を要求するのは合理的でない。廃止するのは、技術的にももったいない。海外に後れを取ってしまう。

2) 2班

○対話テーマ；高レベル放射性廃棄物処分 他

○参加シニア；村島正康、大塚徳勝

○参加学生；4人(大学院2年生 熱工学研1人、大学院1年生 熱工学研1人、学部4年生 熱工学研1人及び海エネ研1人)

○対話の概要；

- ・対話を行った項目は以下のとおり。
 - ・使用済み燃料の処分方法(300mより深い地層処分等)
 - ・再処理及びガラス固化、直接処分
 - ・使用済み燃料の保管状況(原子力発電所、六ヶ所村再処理工場)
 - ・海外の動向(フィンランド等)
 - ・日本の動向(高知県東洋町、国による科学的有望地)
 - ・各種電源の経済性(発電原価に占める燃料費割合)
- ・学生によるグループ発表は以下のとおり。
 - ・原子力への国民的理解を得るためには、学校でのエネルギー教育及び国、事業者による一層の広報活動が重要
 - ・使用済み燃料の処分は、再稼働の有無に拘わらず避けられない課題
 - ・各種電源には、一長一短があり、一極集中は避けるべき、分散が必要
 - ・限りある資源は有効に使用すべき



- ・3年前のグループ対話では、学生5名のうち、1人の女性が非常に活発で、男性の影が薄かったが、今回4人の男性は、対話に熱心に取り組んでおり、好感が持てた。

3) 3班

○対話テーマ；基調講演2件を踏まえて

○参加シニア；廣 陽二（所用で後半退席） 香川達雄

泉館昭雄

○参加学生；大学院2年生1名、大学院1年生1名、学部4年生1名

○対話の概要；

- ・シニアは前半は廣氏が司会、後半は泉館が司会、学生は益田敏明君がリーダー
- ・はじめに 世界の国別原子力発電設備の稼働基数資料（米国原子力エネルギー協会、444基稼働、6月23日）、同じく国別建設予定基数資料（奈良林教授、100基以上建設が続く）、スウェーデンは、2040年以降も原発運転を決定・資料（原子力国民会議）を配布し、説明した。（泉館）
- ・次に益田君の司会で、学生は順番に意見表明、質問をした。全員が発言し活発な対話であった。
- ・主題前半では放射線量の人体健康への影響、後半は原子力発電所の信頼性、安全について、又高レベル放射性廃棄物地層処分、廃棄物の半減期短縮技術の研究等新技術開発について意見交換した。
- ・人体健康への影響では、食物による免疫力向上研究・実用結果を宇宙飛行士の例で説明。長崎、広島被曝結果と福島との比較、現行1mSv/h規制の妥当性有無とせきの状況。
- ・原子力発電所の信頼性、安全については、リスクとは何か、自動車死亡事故と原発事故確率の比較、福島一1と同じ地震・津波を受けながら正常に運転した女川原発とこれに対するIAEAの高い評価、その時のエンジニアの行動。
其の他にもんじゅの事故内容、これからとか多岐にわたって意見交換した。

○まとめ

- ・マスコミ情報と今回得た情報との乖離を確認。
- ・日本は、世界最高の技術力を有し、他方福島の大事故経験とその対策技術を、持っている。これを世界の原発運転、建設に役立てるべきである。
- ・化石燃料の枯渇、地球温暖化を、事実として受け止める。

4) 4班

○対話テーマ；基調講演2件を踏まえて

○参加シニア；野村眞一、松岡信明

○参加学生；熱エネ研究室／海エネ研究室 大学院生3名、学部4年生1名

○対話の概要；

- ・基調講演2件（早野睦彦氏、演題：我が国、世界のエネルギー事情—原子力をどう考えるか、及び、大塚徳勝氏、演題：知って安心、知らないと怖い放射線・放射能）を受け、第4班の学生4人（熱エネ研究室／海エネ研究室 大学院生<3名>、学部4年生<1名>）にシニア2人（松岡信明、野村眞一）が加わって議論し、その結果は参加者の前で報告された。
- ・対話会では、最初に参加者の自己紹介を行い、この後、進め方を協議・確認し、これに従って、役割分担の設定（進行、記録、発表資料作成、発表）、討議テーマの決定、対話の進行、結果の纏め、及び、発表が行なわれた。
- ・議事では、班員の発言を受け、進行係がこれを班員に戻して議論を深めた結果、自発的で活発な議論が展開されたと思う。この間、シニアは議論が行き詰った時の方向付けのアドバイス、及び、事実やデータ紹介等の形で参画する形でサポートを行った。
- ・短時間の体験ではあったが、この対話を通じ、次の点の一端を感じ取ってくれた手ごたえを感じた。
 - ・エネルギー問題は自分たちの生存・生活活動に密接に関連する重要な問題であり、これを機会に積極的にかかわっていく必要性
 - ・自分の目で調べ、その内容を取捨選択して意見とする事が求められる事
 - ・メディアは、それぞれ異なる視点や論点で報道しており、受け取る側には判断する力が求められる事
 - ・自分の意見を持ち、同時に、周りの人の意見を聴いて合意点を見つける事
 - ・その結果を人が解るように説明する事
- ・この経験が学生の成長の一助になれば幸い。

4. 各グループのまとめ、発表

1) 1班

○発表テーマ；もんじゅを今後どうするべきか

○発表内容

- ・もんじゅは資源少国である日本にとって必要であり、国が推進すべきである。
- ・国はメディアを利用して国民に情報を公開し、義務教育において正しい知識及びリスクを教えることが必要である。
- ・もんじゅを廃止することは技術者の減少、技術力の低下につながり、もったいない。また、海外にも遅れをとる。

2) 2班

○発表テーマ；メディアリテラシー

○発表内容

- ・原発に悪いイメージを持っている人が多い。
- ・義務教育において、原子力発電所についての教育を実施する必要がある。また、国民レベルで原子力発電の仕組みや危険性について理解を深める



ことが必要である。

3)3 班

○発表テーマ；原子力に関する正しい理解

○発表内容

- ・一般大衆はメディアの影響を受けやすい。
- ・事実を知り、原子力について理解を得ることが必要である。
- ・事実の上に立ち、自分の意見を持つことがエンジニアの心構えである。
- ・将来的に見れば、技術的な問題から原子力の再稼働は必要である。



4)4 班

○発表テーマ；日本の電源構成の将来像

○発表内容

- ・2012年11月時点で、火力が90.6%を占める。原子力は2.7%である。
- ・原子力発電のメリットは、安価な燃料コスト、エネルギー自給率の向上、燃料備蓄が可能等がある。
- ・原子力発電を普及させるには、国民の正しい理解が必要である。

5. 各参加シニアの感想

○早野睦彦

当初、学生の参加登録数は23名であったが実際の参加者は20名程度で、基調講演の後、帰った学生も4～5名いたようで対話会での参加者は16名と些か少なくなりました。

私は原子力には3つの大きな課題があると考えている。ひとつは本来のエネルギー源としての位置づけ問題、もうひとつが低線量広域被ばく問題、そして高レベル廃棄物問題である。

基調講演はこのうち前者の2つを取り上げていただき、私は「我が国、世界のエネルギー事情—原子力をどう考えるか—」と題してエネルギーと原子力について話をした。原子力の基本的理解に不可欠なこの2テーマが少しでも彼らの認識を新たにする事になればうれしい限りである。

対話会は第1班に入った。学生4人、シニア2人で構成である。テーマは学生側から提示することになっていたのであるが、私が基調講演の自己紹介で話した高速炉について関心を集めたためかもんじゅ問題に集中した。

もんじゅ問題の議論を通じて、学生たちはメディアで報じられる内容と実態との乖離があることに気づき、メディアと専門家の接し方の問題や資源小国にもかかわらず義務教育でエネルギー問題を扱わない不合理さなど色々な課題があることに気づいてくれた。

最後に第4班までのそれぞれのグループ発表を聞いて、皆さん実に素直に受け取ってくれうれしく思ったと同時に全く反発がないことに些か気になった次第である。これからの21世紀を担う若者たちが高い視座に立ち広い視野で物事を考えてくれることを切に願い、光武先生の今後のご指導に期待する。

○村島正康

3年振りの佐賀大における対話会であった。来年の再稼働が視野に入った九州電力玄海原子力発電所の地元大学での開催はグッドタイミングとなった。

今回は、エネルギー及び放射線に関する基調講演後に、グループ対話を行うこととし、学生からの事前質問を無くした。これは、2年間、途絶えた対話会を、是非とも復活させるために、学生が参加しやすいよう、簡素化を図ったものと推測している。

今回、出席学生は、16名（当初参加予定23名）で、4班に分けており、第2班は学生4名（参加予定6名）であった。10名前後の対話会は、学生同士の譲り合いのような空気が働き、積極的な発言が出にくいものがあるが、4名だとそれが感じられない。やはり、少人数の対話は効果が上がると思った。

毎度の対話会同様、学生は、シニアの考えをよく理解しており、シニアの主張に沿ったグループ発表を行う。そもそも、殆どの学生が、原子力の再稼働を認めており、原子力に反対する理由が特になくことから当然なことと思われるが、「物分りの良さ（良過ぎ?）」は若干気になるところではある。

但し、再稼働の必要性等の認識は、対話会で得られた情報が新たに加えられと、漠然としたものから具体的根拠を伴った確かなものへと変化すると考えられる。SNW対話活動がその一助になれば、有り難いと思っている。

また、対話終了後の懇談会にて、九電原子力部門に内定している学生に、再稼働の多忙な時期に、多分、現場で業務できるタイミングの良いこと（学生も認識していた）及び新入社員としての心構え、更には本社と現場の仕事の違い、本社と現場との職場ローテーション等々について九電原子力出身の先輩として語る事ができた。これまでの対話活動で初めての経験であり、今回、参加して最も意義深いものであった。

○大塚徳勝

今回の対話会には、従来の対話会に比べて、特徴が二つあった。

一つは、基調講演が従来の対話会と異なり、2件の講演、『エネルギーと原子力』および『放射線と放射能』に関する講演があったことである。

もう一つは、各グループの対話テーマも事前に設定せず、各グループが基調講演を聴いた後に独自に設定して、対話を進めたことである。

従来の基調講演は、「原子力の必要性」の説明に重点を置かれていたので、いかに必要性を訴えても、放射線と放射能に対する不安の払拭には役立たず、全体として説得性に欠けると思っていたが、今回は「放射線と放射能」に関する基調講演があったため、説得性が一段と増加したと思われる。

対話の内容も、「もんじゅの問題」、「使用済み核燃料の再処理問題」、「高レベル放射性廃棄物の処理・処分問題」をはじめ、「各エネルギーのコストの問題」、「温暖化防止の問題」、「電源構成の問題」、「メディア対策とメディアリテラシーの問題」など多岐にわたっていたが、学生諸君が基調講演を聴いただけで、これらの問題を自主的に選定して、対話を積極的に進めたことを高く評価したい。

参加学生数は16名（4グループ）で、これまでより少なかったが、逆にシニア数は9名で、多過ぎたと思う。学生数3名に対して、シニア3名のグループもあり、今後は「シニアのシャベリ過ぎ」の防止からも、また費用対効果の観点からも、事前調整が必要と思われる。

○香川達雄

学生は機械工学科の学生であったことから良く我々の話を理解したと思う。ただ原子力は重要だと思うが、放射線被曝の安全性と放射性廃棄物の処理についてはまだかなり不安を持っているようであった。

私は100ミリシーベルトまでの被曝ならば全く問題ない事、宇宙飛行士の被曝量が福島で問題にしている被曝量の数百倍であるが、放射線防護で全く被曝の影響の心配がなくなっている事、高レベル放射性廃棄物の処分も技術的には全く問題なく、単に住民の心理的な問題が場所の選定を遅らせているだけだと説明し、更に太陽光、風力発電は主電力にはなり得ないことも説明した。

原子力をやめるなど、エネルギー対策を誤れば、50～100年後に影響が現れる。太陽光や風力にも公害問題がある。比較評価をしてほしい。

学生の皆さんは理解したと思うが、やはりマスコミの報道に相当に影響を受けている感じがした。

対話会の発表では第一班の学生が高速炉もんじゅの問題を取り上げていたのには驚いた。今後は軽水炉やその再稼働の必要性だけではなく、10年、20年先を見通した高速炉のことを話題にするのも若い学生には良いのかもしれない。

○泉館昭雄

受講生は少なかったが、その分対話が充実していた。

懇親会も学生の講演会以外の要望を聞いて相互に良かったと思う。基調講演を2題準備したことも良かった。

対話は学生主体で進めることができた。今回も“事実を話せばわかる事”、“マスコミ情報と今回提供した事実の乖離を認識した事”を実感した。今後ともこの方式を希望する。

○野村眞一

海エネ研究室及び熱エネ研究室の大学院生（3人）と学部学生（1名）に対し、シニア（2名）でグループ対話を行った。対話では、まず、基本的な進め方をシニアよりア

ドバイスし、これに従って学生主導で役割を決め、テーマ設定～発表が行われた。

今回の対話では、予めテーマを設定せずに、基調講演をもとに参加者で意見を出し合って決めたことが、全員参加型の自発的な対話の進行には有効であった様に思う。

議論を通じて話を進めることは、学生にとっては経験の少ない手法であったことが察せられ、取り掛かり段階では多少戸惑いも感じられたが、順応して自発的な議論が進められた。このことは、大学での教育・指導が活かされた成果であったと考えられる。

短い時間の対話ではあったが、これを通じ、次のことが頭の隅に残ったら幸い。

- ・物事にはいろいろな意見や視点があること
- ・定量的なデータや事実を考の起点にする重要性
- ・自分の意見をまとめ、周りの人と議論した合意
- ・その結果を解かりやすく説明

時間が許せば、発表に関する参加学生間での質疑応答の時間を持てば、更に深まった対話になると感じた。この経験が学生の成長に役に立つことを期待する。

情報は一つでも見方はさまざまであり、自分で評価してほしい。次の世代を担ってほしい

○松岡信明

機械工学科の学部4年生から修士2年生までの4人と対話した。ファシリテーターの野村真一氏の巧みな導きによって、学生それぞれに司会進行役、記録役、発表内容構想役、発表資料準備役の役割分担をさせたことは大変良かったと思う。このことによってシニアが一方向的に喋るのではなく、学生自らが問題提起して議論する形をとれたと思う。

最初にあるべき電源構成を議論し、その結果原子力に一定以上の比率を持たせることが重要であるとの全員一致の結論をみた。この背景として、学生のうち少なくとも2名は海洋温度差発電専攻で、研究を通じて再生可能エネルギーの限界について実感しているということがあるように感じた。

次に、一定比率以上の原子力を維持するためにどうするか、という議論に進んだ。遅々として進まないが、規制委員会の審査をパスした原子力発電所は稼働できるルールは確立している。再稼働した発電所の安定運転で信頼を積み重ねることが現時点で最善の対策であるという結論になったように思う。極めて常識的な結論になるが、シニアからの情報を取り入れて多面的な議論を学生主導で行えたことは有意義であった。

○廣 陽二

今回の対話会はいくつかの点で従来の対話会のやり方と違う試みを行った。一つは基調講演を「エネルギー事情、原子力の必要性」に加えて「放射線と放射能の理解」を加えたこと。ふたつ目はシニア内での議論と大学側の事情（夏休み明けの学生の準備時間不足等）を踏まえて対話を簡素化し、多少学生からの事前質問及びそれに対する回答作成は行わず、また、各グループとも事前にテーマを設定せず、2つの基調講演を踏まえて自由に対話を進める形をとった。

早野氏の基調講演は学生にとって普段なかなか知る機会がないエネルギー事情を聞けて、良い勉強になったのではないかと思う。時間は少し短かったかもしれないが、要領よく話された。

大塚先生の基調講演はユーモアをまじえて話されあつと言う間に過ぎたが、正しく知れば放射線は怖いものではないことを学生のみならずシニアも再認識できて有意義であった。

佐賀県は玄海原子力発電所の立地県でもあり、参加した学生は基調講演に非常に熱心に耳を傾け、また、対話においても原子力に対する自分の思い、疑問を率直に語ってくれ、シニアもいつもより熱意をもって対応していただいた。

○小池正実

2013年に続いて参加することができ、感謝したい。

今回の対話では、事前に質問やテーマを出さずに、基調講演をもとに学生側でテーマを決め対話を行ったことから、学生が能動的になった気がした。

当班だけでなく、他班のテーマや発表内容などからも、原子力発電に対する学生の受容性を高く感じ、メディアや世論との違いを改めて認識した。

佐賀大学の学生は、他の工学系の学生と同様、エネルギー問題について、メディア等を鵜呑みにせずに、多面的に理解しようとしている。その態度や考え方に希望や勇気をもたらした感がある。

主催された光武先生の閉会挨拶では、原子力発電を含むエネルギーに対する正しい理解や産業・生活の基盤としての重要性のほか、「気概」についても言及されたことに感銘した。気概を大切に行動したい。

6. まとめ

- ・今回の対話会はいくつかの点で従来の対話会のやり方と違う試みを行った。一つは基調講演を「エネルギー事情、原子力の必要性」に加えて「放射線と放射能の理解」を加えたこと。ふたつ目はシニア内での議論と大学側の事情（夏休み明けの学生の準備時間不足等）を踏まえて対話を簡素化し、学生からの事前質問及びそれに対する回答作成は行わず、また、各グループとも事前にテーマを設定せず、2つの基調講演を踏まえて自由に対話を進める形をとった。
- ・佐賀県は玄海原子力発電所の立地県でもあり、参加した学生は基調講演に非常に熱心に耳を傾け、また、対話においても原子力に対する自分の思い、疑問を率直に語ってくれ、シニアもいつもより熱意をもって対応していただいた。
- ・今回の対話会を通して、学生諸君はわが国の厳しいエネルギー現状の再認識、放射線・放射能の不安払拭更にはサイエンスリテラシー、メディアリテラシーの大切さに気づいてくれたようであった。

閉会挨拶（光武教授）

シニアに感謝する。原子力に対する身の回りの人々の偏った見方や正しい理解の重要性に気付いたと思う。エネルギーがなければ産業は成り立たない。シニアの元気さに圧倒されたと思うが、気概を持ってほしい。

以上